

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—
報告書

現代インドにおける発展径路とデモクラシー
—核軍備・原子力エネルギー政策の変容—

派遣者：中西 宏晃

派遣期間：2013年2月10日～3月13日

派遣先：ジャワハルラール・ネルー大学大学院国際学研究科（インド）

キーワード：発展、デモクラシー、国家安全保障、核軍備、原子力エネルギー、政策変容

1. 研究課題について

本研究の目的は、国際的な相互依存関係が強まるグローバル化の時代における現代インドの発展とデモクラシーの実態、そして、それらの今後の方向性を把握するために核軍備の開発と運用ならびに原子力エネルギー開発に関する政策の変容の動態について多面的かつ複眼的に考察することである。それにより、新興国として政治・経済・軍事的にも国際的に台頭しつつあるインドが核を利用することを通じて一体どのような国作りを目指そうとしているかを明らかにする。すなわち、持続型生存基盤たる国家安全保障にかかわる防衛・エネルギー安全保障について議会制民主主義国家であるインドの核軍備・原子力エネルギー政策の変容の動態を手がかりに考察する。また、ポスト冷戦期において核をめぐるグローバル・ガバナンスが変動する中で、インドのような新興国がそれにどのような影響を及ぼすか、または逆にどのような影響を及ぼされているかについても国際安全保障という持続型生存基盤の視点から考察する。

2. 派遣の内容

2013年2月10日から3月13日の約1ヶ月間、首都デリーを基本として滞在研究を行った。なお、2月24日から26日までの間ムンバイに、そして、2月27日から3月2日までチェンナイに滞在した。

派遣の主な内容は主に以下四点である。第一に、政策担当者・科学者・軍人が参加するセミナーなどに参加するとともに、また可能な限りインタビューの機会を持つことにより、現代インドの核軍備ならびに原子力エネルギー開発の現状把握に努めることである。第二に、発展とデモクラシーの観点から、政策決定過程を担う一部のエリート層だけではなく、例えば反原発運動の運動家などとも積極的に交流する。第三に、現地研究者と意見交換を行い、拙著の論文について批評をもらうなど、今後の研究課題や計画の設定をすることである。第四に、ネルー記念博物図書館や各研究所やシンクタンクの図書館を利用し、また現地書店に出向くなど、広範な資料収集を行うことである。

3. 派遣中の印象に残った経験や体験

3.1 核軍備開発・運用の現状

インドの核軍備の開発および運用の実態に迫るため、インド側にどの程度の考え方の幅が存在し、そ

れがどの程度収束しつつあるかを把握することに努めた。一番印象に残った点は、1998年当時に懸念された曖昧さが徐々に薄れつつあるということである。最大限核抑止論者であっても最近では中国と均衡するような核軍備能力の実現を目指すことには慎重な意見を述べるようになりつつある。だが依然として、核兵器の先制不使用という政府の核政策には疑問を抱いており、それはインドの主要都市に一発でも核兵器が炸裂した場合の被害の甚大さを懸念しているようであった。対照的に、最小限・最低限核抑止論者ないしは軍人は核兵器の先制不使用を濃淡こそあれ支持しているようである。彼らの考え方には、核弾頭と弾道ミサイルを分離した状態に留めておくことで相手から核兵器が使用されないようにすることだけでなく、核軍備競争に陥らないようにするといった論理的つながりがあるようである。特記すべきは、意見交換した一部の軍人に、インドの核抑止はあくまでも報復を主眼としており、「相手による一発目の核兵器による攻撃を受けてもよい」とまで言い切る者がいたことである。このことから直ちに公式なインド核政策が把握できるわけではないが、インドの核兵器に対する考え方が北朝鮮などの一部の好戦的な核兵器保有国とは異なり、かなり消極的なものないしは受け身的なものへと収束しつつあるように感じられた。

3.2 原子力エネルギー開発をめぐる世論形成の現状

原子力技術開発の中心地であるムンバイにて、原子力エネルギー政策に対する世論形成の実態の把握に努めた。一番印象に残った点は、市民教育を担う国営のネルー科学センターが、インド原子力発電公社 (NPCIL) の支援を受けながら 2011 年にインド初の原子力エネルギーに関する恒常的かつ専門的な展示を設け、科学的知見に基づく原子力の可能性を主張しているのに対し、反原発運動の運動家が西洋近代的な生活スタイルの見直しのみならず、科学的な知見や思考自体も疑わなければならないと主張していたことである。この事実のみで直ちに世論形成の実際が把握できるわけでない。だが、少なくとも国営のネルー科学センターが、フクシマ事故に配慮した科学的知見（例えばインドには断層が本土の近くにはない）に関するパネル、そして 2008 年に締結された印米原子力協力協定を始めとする国際原子力開発協力の重要性を強調するパネルを設置するとともに、さらに、原子力開発によって農村が潤い発展するという趣旨の多言語で書かれた漫画冊子 (NPCIL 発刊)¹ を子供などにも広く配布しているという事実は大変興味深いものがあつた。【別紙参照】

4. 目的の達成度や反省点

持続型生存基盤という視座からインドの核政策の変容の実態の一端を明らかにしようとするのが本研究の目的であつた。達成度については、国家安全保障の観点からみた核軍備の開発・運用について言えば、インドの核政策はかなり消極的ないしは抑制的になりつつあることが垣間見られた。他方で、原子力エネルギー開発について言えば、世論形成が今後どのように推移していくかを予測することは容易ではないが、少なくとも国側はフクシマ事故後の反原発運動の高まりに配慮しながら国際的な原子力開発協力を始めとする高度原子力技術開発の実施に対する国内外の信認を得ることに熱心であることが垣間見られた。だからといってインドの発展経路ないしは持続型生存基盤において、核軍備が不要となりつつあるとか、高度な原子力エネルギーの積極的な推進が必須であると直ちに断言することは時期相

¹ 筆者が現地で確認したところ、英語版・ヒンディー語版・マラーティー語版が存在する。物語は三部構成となっており、第一部は原子力発電を誘致する際の原子力の安全性（特に放射能の危険性）について村全体で話し合うという内容、第二部は主人公であるブディヤが実際に原子力発電所を訪れ、誘致に疑問を持っていた自らの考え方を変えていくという内容、第三部は原子力発電所建設に関する地元住民間の紛争解決の様子が描かれ、最終的に伝統的な村落が近代的な風景に様変わりするという内容である。

承と言える。今回の調査の反省点は現実のインドの核政策のニュアンスや幅についてより敏感な調査が求められているにもかかわらず、筆者の能力不足により、かなり部分的な方法や考察に留まったということにある。

5. 今後の派遣における課題と目標

今後の派遣の課題については、2013年3月15日から24日の間ワシントンDCに滞在し、インドの核政策、主に核軍備の開発ならびに運用や印米間の原子力開発協力について米国の主要な研究者の間でいかに把握され、議論されているかを把握する予定である。その後、2013年4月7日から2月末頃までロンドン大学に滞在し、ポスト冷戦期における核をめぐるグローバル・ガバナンスの変容と新興国（とりわけインド）の台頭との関係性についての理論研究を行う予定である。これら米・英における滞在研究はグローバリゼーションの時代におけるインドの核政策の変容をより立体的に解明するために必須である。それにより、インドの持続型生存基盤ならびに発展経路の解明に資する、国際安全保障の動態とインド国家・社会との複合的な相互関係をより明らかにできると考えられる。最終目標としては、インドが核を使用すること自体の意味づけについてより深い理解と考察が提供できるようにしたい。

【別紙】

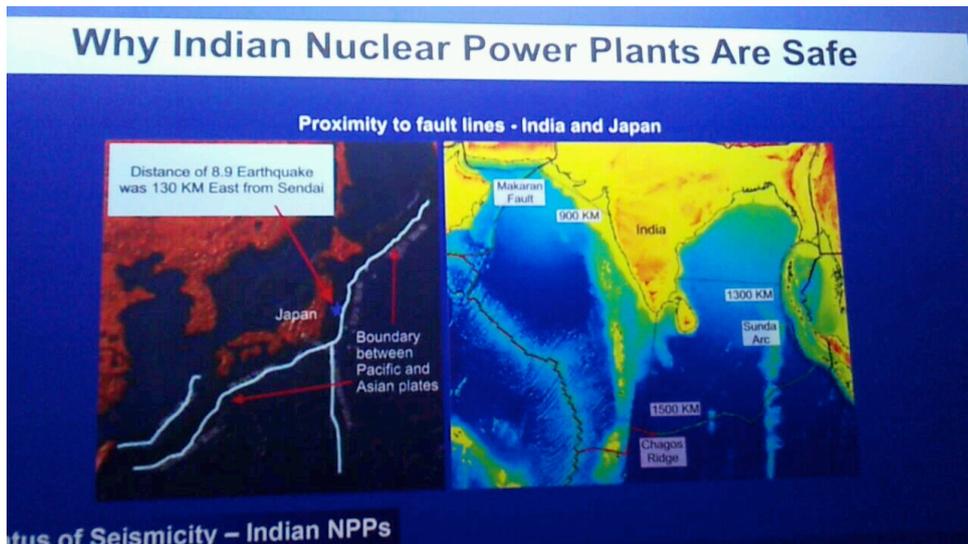


写真1：「なぜインドの原子力発電所は安全なのか」と題して日印間の断層の違いを説明するパネル（筆者撮影）

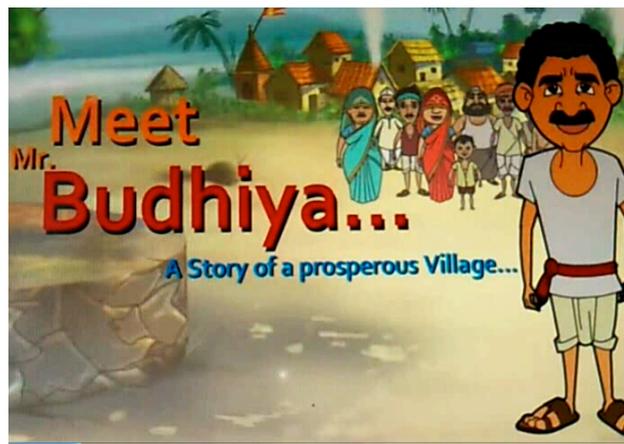


写真2：「原子力発電所の誘致で栄えたとある村の物語」と題する NPCIL 作成のアニメーション（筆者撮影）



写真3：先生に引率されて原子力発電に関する展示を見て回る地元の小学生達（筆者撮影）